

## 自己表現力を高めるアウトプット活動の工夫 ～場面上の相手と聞いている相手を意識したプレゼンテーション活動を通して～

福政 純子

鳥取大学附属中学校 英語科

E-mail: fukumasa-j@tottori-u.ac.jp

**FUKUMASA Junko (Tottori University Junior High School): A Study of Devising output Activities to Enhance Self-expression Expression — Activities to work through with an awareness of who is on the scene and who is listening.**

**要旨** — 本研究では、中学校英語の授業において、writing や speaking 等のアウトプット活動（プレゼンテーション）をする際に設定上の相手と実際の聞き手となる相手の両方の「相手」を意識させることが、生徒の表現力に与える影響について調査した。どのような設定で誰に向けて発表するかを考えることを通して、生徒は適切な表現を考え、流れのある内容の文を考え、複数人の前でプレゼンテーションをすることで、伝わりやすい話し方とは何かを考えることにつながった。このような 2 種類の相手を意識するアウトプット活動を継続して実践した結果、多数の生徒の表現力が向上する傾向が見られた。

**キーワード** アウトプット, 自己表現力, プレゼンテーション

**Abstract** — In this study, we investigated the impact on students' expressive ability of making them aware of both the "audience" in the setting and the actual audience when they engage in output activities such as writing and speaking in junior high school English classes. Through thinking about the type of setting and to whom they would be presenting, students considered appropriate expressions, thought about sentences with flowing content, and gave presentations in front of multiple people, which led them to think about what is an easy way of speaking that can be conveyed. Continued practice of these two types of output activities with an awareness of the audience tended to improve the expressive ability of a large number of students.

**Key words** — Output, self-expression, presentation

### 1. はじめに

中学校学習指導要領外国語編では、「思考力、判断力、表現力等」の育成に関わる目標として、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。」と挙げている。さらに、コミュニケーションを行う際は、「目的や場面、状況などを意識する必要がある」「理解したことを活用して「表現したり伝え合ったりすることが重要になってくる。」とある。このことから、既習の知識や技能を

生かし実際の場面を想定しながら言語活動を行っていくことが求められていることが分かる(文部科学省 2018)。普段の授業においても、言語活動を行う際、単なる繰り返しではなく、生徒がその活動の目的や場面を意識して行えるようにすることも大切である。そのような経験を繰り返すことを通して、生徒は目的に合った会話や表現が自然に身についていくと考えられる。

今年度、鳥取大学附属中学校(以下、本校)では、学習した英語や既存の知識を用いてコミュニケーションを行えることを目標として、個人・協同学習を取り入れながら話す、書く等のアウトプット

活動の場面を各単元に設定してきた。そして、アウトプット活動を通して、課題に向かって「主体的に」「対話的に」「深く」考えることのできる「やりくり授業」を実践してきた。本研究では、生徒のやりくりとして、伝える相手をイメージして、自分の知識や経験と結び付けて思考し、表現する「他者意識を持った自己表現活動」としてアウトプット活動（プレゼンテーション）を進め、生徒の表現力がどう変化するかを見取ることとした。手法としては協同探求学習のプロセスを取り入れ、個人→ペア→グループという流れで取り組ませた。

## 2. 研究の方法

仮説「場面上の対話する相手及び発表する際の聞き手を意識した writing, speaking 両方のアウトプットを含むプレゼンテーション活動を継続して行うことで、2つの相手を意識した文やパフォーマンスが増え、表現力の向上につながるのではないか。」

この仮説をもとに授業実践を行い、発表の様子の変化と生徒のスピーチ原稿の内容や振り返り用紙の記述から、生徒の変化を分析した。中学校学習指導要領解説外国語編(2018)では、英語の(4)話すこと[発表]の目標として、「『日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができるようにする。』とあり、解説として、「事実や自分の考え、気持ちなどを『整理』するとは、話し手として伝えたい内容や順序、聞き手に分かりやすい展開や構成などを考えたり、事実と考えを分けて整理したりするなど、話す内容を大まかな流れにしてコミュニケーションの見通しを立てることを意味している。」としている。そこで、本実践では、目的に合うよう様々な既習表現を用いて書いていること、場面上の相手に適切な表現を使っていること、聞き手を意識した話し方をしていることを「表現力」と定義した。

### 2.1 研究テーマに迫るための手立て

#### 2.1.1 2つの「相手」を明確にする

プレゼンテーションの目的と、場面上の伝える相手を明確にして話す内容を考えさせる。相手に

よって使用する語句や表現を調整しながら原稿を書くことに大切な学びがある。また、授業中実際に聞いている「相手」はペアや班の友達であるから、その実際の聞き手にわかりやすく伝えることも目標とした。

#### 2.1.2 ペア、班の活用

発表原稿を書き上げ、練習した後、ペア同士で発表させ、お互いにアドバイスし合ったり工夫していたところを褒め合ったりするなど、発表への自信を持たせながら班への発表につなげた。班では4～5人が順番に発表し、お互いにアドバイスし合う。その後班のベストスピーカーを選び、各班の代表生徒のプレゼンテーションをクラス全員で聞いた。元々英語で話すことに抵抗がある生徒でも、徐々に活動に慣れ、楽な気持ちで発表に取り組むことができるようにした。

#### 2.1.3 既習文法、既習表現を生かす場の設定

プレゼンテーションの内容を考える際に、場面に合う表現とは何か、自分の考えを伝えるのに適切な語句や構成はどうしたらよいか等について、考えをまとめ整理する時間が必要である。活動の1時間目は原稿を書く時間とし、まとまった内容を話すための準備や練習がじっくりできるようにした。

#### 2.1.4 タブレット端末の活用

プレゼンテーションをより効果的にするため、タブレット端末の画像複数枚を用いて、聞き手の視覚に訴えながら発表させた。写真やイラストには、聞き手が知らない場所やものをわかりやすく伝えたり、強調したりする効果もある。さらに、班で発表する際には、お互いの発表をタブレット端末で録画し合い、後で自分の発表が録画されたものを客観的に見て、振り返りの材料とした。



図1 タブレット端末を用いた発表、録画

## 2.2. 実践の対象および時期

実践の対象は、鳥取大学附属中学校 3 年生である。そのうち、6 月までの授業で行った活動とともに英語の表現活動に積極的な生徒 10 名、普通に取り組む生徒 8 名、やや消極的な生徒 4 名を抽出し、調査を実施した。プレゼンテーションの授業実践は 2022 年 6 月から 2022 年 11 月の間に 4 回行った。その計画を、次の表 1 に示す。

表 1 実践計画(活動内容と場面上的の相手)

月	設 定	場面上的の相手
6 月	オーストラリアから日本に来る中学生に、日本でおすすめの夏体験を紹介する。	オーストラリア人の中学生
9 月	日本語を勉強中の外国人留学生に、おすすめの日本の本を紹介する。	外国人留学生
10 月	英語を使ったボランティア活動に申し込み、自分ができるところを PR する。	ボランティアを募集している団体
11 月	アジア EXPO に参加する都市として、鳥取を PR する。	アジア EXPO 実行委員

## 2.3. 生徒の実態

昨年度のスピーチやプレゼンテーションなどの実践の中で、以下の 3 つの問題点が見られた。1) 原稿を書く際に使う表現が限られ、単調な内容のものが目立った。2) 誰に向けての発表であるかが曖昧で、原稿の導入や終末もパターン化しているものが見られた。3) タブレット端末の翻訳機能に頼り、原稿に難しい単語や文を多用したため、発表する際に覚えられない生徒が目立った。そこで、今年度の表現活動では、1) 既習文法を生かす 2) 場面上的の相手に向けた原稿をできるだけ自分で考える 3) 聞き手を意識したパフォーマンスをする、の 3 点に焦点を当てた。

## 2.4. プレゼンテーション活動の流れ

プレゼンテーションの活動は各 2 時間扱いとし、4 回とも表 2 の流れで行った。

表 2 活動の流れ(全 2 時間)

第 1 時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プレゼンテーションのテーマ、場面の確認</li> <li>・発表メモ作成</li> <li>・原稿書き(分析①②)</li> <li>・タブレット端末を用いて、画像選び</li> <li>・ペアで原稿を読み合い、アドバイス</li> <li>・(家庭学習として)原稿を読む練習</li> </ul>
第 2 時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人練習</li> <li>・ペアで発表 →アドバイスタイム</li> <li>・班で発表、タブレット端末で録画(分析③) →アドバイスタイム</li> <li>・班の代表者によるクラスでの発表</li> <li>・ペアで再度発表</li> <li>・振り返りシートに記入(分析④)</li> </ul>

## 3. 結果と考察

場面上的の相手と聞き手を意識したアウトプット活動と表現力の向上との関連を把握するため、前述の方法で実践し、その結果を用いて次の 4 つの点について考察した。

〈場面上的の相手を意識した表現、内容について〉

①発表原稿に既習文法が使われる回数が増えているか。

②発表原稿には、場面上的の相手を意識した表現が増えているか。

〈聞き手を意識した話しぶり、記述について〉

③録画したプレゼンテーション動画にはアイコンタクトの回数が増え、又表情に変化があるか。

④振り返りシートでは表現力を高めるための記述が増えているか。

### 3.1. 発表原稿に既習文法が使われる回数に変化があるか。

これまでの活動から、英語の表現活動に積極的な生徒をグループ A、普通に取り組む生徒をグループ B、やや消極的な生徒をグループ C として、4 回の発表原稿の中で、2 年生以上の既習文法

が使われた回数の平均を A～C のグループ別に集計し得られた結果を表 3 と図 2 に示す。

表 3 原稿中の 2 年生以上の文法の平均使用回数

時期 グループ	6 月	9 月	10 月	11 月
A	4.2	3.9	5.4	8.1
B	3.6	2.9	3.8	5.9
C	2	2.2	3	6

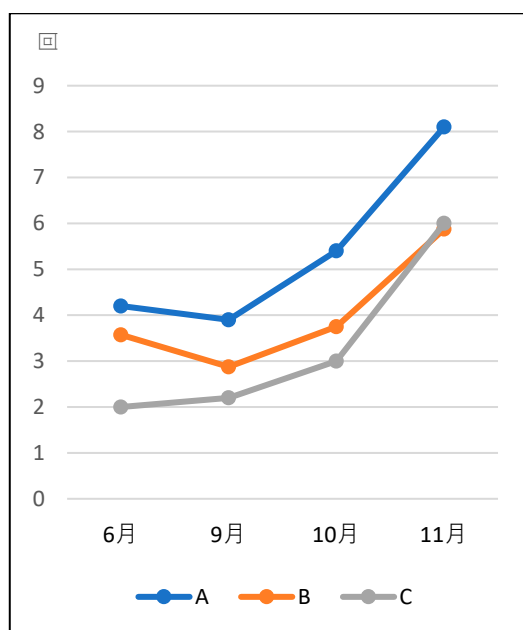


図 2 スピーチ原稿中に見られる 2 年生以上の文法使用回数の平均

A, B, C の生徒ともに、表 3, 図 1. が示すように、スピーチを重ねるにつれて、既習文法を使う回数が増えている。グループ A とグループ C の生徒の原稿中に見られた文法の具体例を以下に示す。

〈グループ A の生徒〉

6 月

2 年次以降に習った文法使用は 2 回で、受動態と接続詞であった。

・is held ・When I was

11 月

2 年次以降に習った文法使用は 7 回で、分詞の後置修飾、接続詞 There is(are), 現在完了形, 最上級, 接続詞 that の省略であった。

・People living in ・Because ・There is (are)  
・have lived ・the most beautiful ・I think Tottori is

〈グループ C の生徒〉

6 月

2 年次以降に習った文法使用は 2 回で、現在完了形と連語であった。

・haven't been ・In addition

11 月

2 年次以降に習った文法使用は 5 回で、受動態, 比較級, 最上級, 接続詞であった。

・is made from ・is made of ・is softer than

・one of the most ・Therefore

抽出生徒 2 人共、教科書本文で学習した According to や Therefore の表現を思い出し、原稿作成の際にその表現を付け足して独自性を出している。

全体的に、回を追うごとに使う文法の種類が増え、使用回数の増加につながっていた。特に、ものの説明に使いやすい受動態や、自分の経験を言うための現在完了形を使う頻度が高い傾向が見られた。また、11 月の原稿では、習ったばかりの関係代名詞を使う生徒がグループ A の生徒に多く見られた。第 1 回目の 6 月から第 4 回目の 11 月までに学習する文法は増えていくが、6 月の時点では、それまでに習った表現が十分に生かされているわけではなかった。生徒達は、プレゼンテーションの経験とともに、これまでに習ったことをより多く生かしながら表現しようとしていることが見て取れた。

### 3.2. 発表原稿には、場面上の相手を意識した表現があるか。

次に、発表原稿に使われている表現は、場面上の相手を意識しているものがあるかを考察した。「相手を意識する」とは、相手の「立場」「年齢」「願いや思い」等である。一方的に自分の考えを伝えるのではなく、相手に配慮した表現があるかどうかを調べた。4 回のプレゼンテーション活動での生徒の原稿中の表現には、具体的に以下のような記述が見ら



れた。

## 6月

場面上の相手:オーストラリア人の中学生

目的:おすすめの体験を紹介する。

〈誘う, 提案する〉

• Let's enjoy together. • Please visit Osaka. • If you have free time, please come to Shan Shan Festival. • How about visiting Hakuto Beach?

〈できること, おすすめの理由を説明する〉

• You can enjoy playing in water. • You can change the flavor. • It's the most beautiful view. • The music is powerful, and it makes you excited.

外国人中学生に向けて, 楽しめる活動を提案したり, 誘ったりする表現が多く見られた。ただ, 相手が季節が逆であるオーストラリアから来ること, 中学生として, ということに配慮し, そのことに触れた表現はほとんど見られなかった。

## 9月

場面上の相手:日本語を勉強している留学生

目的:おすすめの本を紹介する。

〈日本語の難易度, 本の読みやすさに配慮する〉

• Its Japanese may be a little difficult, but you can read it in English in your country. • This story is short, so I think it is easy to read. • It is not used difficult Japanese word, so you can understand this story easily.

〈相手の好みを考慮する〉

• If you like Disney movies or anime, please read this in Japanese. • If you like love story or adventure, read this book!

〈日本語の上達や文化の理解という目的を示す〉

• If you read it, you will know Japanese culture. • This is the best book when you study Japanese. • If you want to learn Japanese, you should read Momotaro.

日本語が堪能ではないということに配慮し, 易しい日本語で書かれていて読みやすいもの, 相手の興味に合ったもの, という相手に配慮しつつ本をすすめる表現が多く見られた。また, 「この本を読めば〜できる」というメリットを相手に伝えてい

る表現も見られた。

## 10月

場面上の相手:ボランティアを募集している団体

目的:自分が英語を使って何ができるかを PR する。

〈自分にできることを伝える〉

• I can introduce its beautiful views and interesting area • I know a lot, and I can tell visitors how to enjoy the place. • I will be able to guide well and will entertain tourists. • I can tell them menu in English. • I remind how to pray in simple English.

〈手助けしたい意欲を伝える〉

• I want to help foreign students. • I would like all tourists to have a good time by my help. • I would like foreign people to know about attractions in Tottori.

英語でボランティアを行える場所として選んでいる理由を, can や be able to を用い, 案内する, 知らせる, 教える等「(自分がよく知っているから)〜できる」とアピールしている生徒が多く見られた。また, 誰かを手助けしたい思いを書いている生徒も見られた。

## 11月

場面上の相手:アジア EXPO 選考委員

目的:鳥取を海外に紹介するのにふさわしいことをPRする

〈魅力を強調する〉

• Tottori is the most beautiful city in Japan. I want Asian people to know and visit Tottori. • Everything is delicious, so please come to Tottori! • The temples like Nageiredo don't exist all over the world. 〈知られていないという事実に触れる〉

• Tottori is not known around the world, but Tottori is a wonderful place. • Tottori is a very small prefecture, but there are a lot of attractive points. • There are more attractive points that you don't know in Tottori. • Many people say, "Tottori has nothing, " even people living here.

〈他の都道府県と比較する〉

・Tottori is not as popular as other prefectures, but..  
 ・I'm sure that Tottori has a good thing that other parts don't have.

〈強い思いをアピールする〉

・I want to tell the world... ・I hope many people will be happy.  
 ・Tottori has a lot of good points, so I want foreign people to know ..  
 ・You will be able to feel heart of Japan.

国際イベントのためのオーディションでは、審査する人に対して、自分の地域を他の地域と比較して PR する必要がある。生徒達の原稿には、鳥取の魅力を強調したり、知られていない部分を宣伝したりし、very, the most, everything などを使って審査に有効にしようという工夫が見られた。「多分知らないと思うけど」「鳥取には何もないと言う人がたくさんいます」などと相手の状況を予想する表現や自分が住む地域の良いところを主張したりする文が多く見られた。

全体を通して、6 月のプレゼンテーションでは、場面上的の相手を意識した表現は、パターン化していた。しかし、その後のプレゼンテーションでは、外国人である相手への配慮が見られたり、本の好みを気にしたりするなど、相手がどのような人であるかを考慮した表現が多くなった。また、年上の人への提案の仕方や、相手が個人なのか団体なのかということも考えて原稿を作っていることが認められた。場面上的の相手を意識したスピーチの経験を重ねることにより、原稿で使う表現を相手によって工夫し、表現が多様になっていることが確認できた。

### 3.3. 録画したプレゼンテーション動画にはアイコンタクトの回数や表情に変化があるか。

生徒一人一人のプレゼンテーションは 4 回とも図 3 のように班の友達同士で録画をさせ、Google Classroom に提出させた。聞き手を意識したアウトプット活動と生徒達のパフォーマンスの向上との関連について、抽出生徒の発表録画の分析から以下のような変容を見取ることができた。

・声の大きさは、1 回目より 4 回目の方が大きい生徒が多かった。

・表情は、1 回目より 4 回目の方が、生き生きと自然な表情でスピーチしている生徒が多かった。  
 ・アイコンタクトの回数は、A～C の生徒全体で、6 月は平均 8.07 回、11 月は平均 10.72 回と、全体的に増えていた。この場合アイコンタクトは、原稿から目を離し、顔を前に向けたら 1 回とした。録画された生徒の発表の様子から、プレゼンテーションの経験を積むほど、アイコンタクトの回数が増え、自然な表情で、ジェスチャーもつけながら、堂々と話すことができていく生徒が増えていることが確認された。例えばグループ C のある生徒は、普段は英語の表現活動に対する意欲があまり見られない生徒である。しかし、ペアや班の友達と、スピーチ発表を繰り返す中で、なるべく原稿から目を離し、笑顔で発表しようとする様子が見られた。このように、多くの生徒が聞いている相手にとってわかりやすい話し方を身につけてきていることが確認できた。



図 3 タブレット端末を用いたスピーチ録画

### 3.4. 振り返りシートには表現力の向上につながる記述があるか。

プレゼンテーション活動の後に書かせた振り返りシートには表現力を高めることにつながる記述があるか、を検証する際、生徒の記述を分類した。振り返りシートの「今回のプレゼンテーションで工夫したこと、考えたこと」「次回に向けて頑張りたいこと」という項目の記述から、1) 視線、声、ジェスチャー、話し方、2) 原稿の構成、内容 につながる文を取り出した。それぞれの項目で、生徒が書いた記述の例を以下に記す。

1) 視線、声、ジェスチャー、話し方

・〇君や〇君のように、ジェスチャーをつけると頭に内容が良く入ってきたので、ジェスチャーの大切さがわかった。

・代表で発表した友達のように、見ている人に目

線を何度も送ったり、相手の様子を見たりしながら発表したい。

- ・〇君の発表が、ゆっくりではきはきと話していて、みんなの方を何度も見ていたので、素晴らしいと思った。次回はまねできるようにがんばりたい。
- ・誰が聞いても気持ちの良い表現になるように工夫した。
- ・相手に聞こえやすくするために、少し声のトーンを上げたり、文の終わりに少し間をあけたりするようにした。
- ・相手の立場から見た自分の発表はどのようなものか、あらかじめ考える。
- ・「相手に伝える」ということを忘れないようにしたい。

## 2) 原稿の構成、内容

- ・みんなが知っている単語を使ったり、1. 文が長すぎたりしないようにした。
- ・友達があまり知らない場所を紹介したので、少しでもわかりやすくするため、簡単な文にした。
- ・習った文法をなるべく使った。
- ・もっと構成に気をつけたい。
- ・さらにプレゼンの内容をおもしろくしたい。

一人一人の生徒達が、ペアや班の友達の発表を聞いて刺激を受け、気づいたことや感心したことを振り返りシートに記述していた。視線や声の大きさに意識を向けると同時に、どんな読み方が聞き手を引きつけるのか、という話し方について考える生徒も多く見られた。また、プレゼンテーションの活動に慣れるにつれ、友達の原稿の内容や構成と自分のものを比較する生徒が増えてきた。そして、次に向けて、反省点を次に生かすなど、次のスピーチへ目標をもって取り組もうとする生徒が徐々に増えたことが確認できた。

## 4. まとめと今後の課題

本研究では、場面上の相手と、実際の聞き手を意識したアウトプット活動(プレゼンテーション)を継続することと生徒達の表現力に関連性があるかに着目した調査、分析を行った。その結果、生徒が2つの伝える相手をイメージし、自分の知識や

経験と結び付けて思考するやりくりによって、**writing, speaking** 両面で自己表現力が向上することがわかった。

本研究の活動で、生徒達は原稿作成、プレゼンテーションのための個人練習、プレゼンテーションという複数のアウトプット活動を経験した。このような過程を繰り返すことで、生徒達は相手によって使う英語を工夫する面白さに気づき、次第に表現の幅が広がったと考えられる。本実践のような他者意識を持った自己表現活動は、相手に向けてどのような語句や文を用いれば自分が伝えたいことが率直に伝わるのか、を考えるトレーニングである。答えが一つではない問題に対してやりくりすることが深い学びとなり、自己表現力を高めることに繋がったと言える。

約半年間にわたる4回のプレゼンテーションの実践は、ペア→班→全体の発表、という形態を継続したため、友達同士で発表し、アドバイスをし合うことに慣れ、自然な話し方で発表できる生徒が増えた。また、タブレット端末で発表を録画することにより、自分の発表の課題や成長を実感するとともに、さらに相手に上手に伝えようとする意欲が高まった。

今後の課題として、生徒の自己評価・相互評価と原稿作成のための時間確保が挙げられる。本研究では、評価は教師による授業での観察と録画の分析としたが、今後はさらにルーブリックを用いて、生徒が自分自身の課題に気づいたり目標を決めたりしながら学ぶことも必要である。録画した発表を自分で見たり、発表後に班でコメントを言い合ったりする時間をもっと増やし、自分で調整していく力を養っていくべきだと思う。また、友達の発表を聞く際に、誰のどこがよかったかをメモできるようにすると、聞き手としても課題意識をもって活動に取り組めたのではないかと。

また、原稿作成の時間を1時間とし、後は家庭で完成させてくるという方式では、自分が作った文と向き合う時間が少ないと感じた。発表後の振り返りシートには、パフォーマンスや友達の原稿の内容のおもしろさについて触れているものは多かったが、目的にふさわしい内容や文かどうかに関する記述は少なかった。それは、設定場面のイメ

ージが不十分で、発表の際も自分や友達のプレゼンテーションが目的に合う、説得力のあるものかどうかという視点も生まれてこなかったからではないか。今後は、場面ごとの相手にどのような表現が適切か考えさせる時間を十分にとり、原稿作成への意欲をさらに高めたい。また、発表の場面では、聞いている生徒自身が「日本語を勉強中の留学生」や「ボランティアを募集した団体の人」という場面上の相手になりきって、お互いの発表を聞かせるようにしたい。そして、そうすることで、教科書で学習した事項が相手に伝わる「生きた英語」となり、生徒たちがアウトプットすることにより主体的に取り組める活動となると考える。

## 5. 参考文献

文部科学省(2018) 中学校学習指導要領(平成30年告示)

文部科学省(2018) 中学校学習指導要領(平成30年告示)解説 外国語編